「戯作三昧」について

佐山祐三

（一）

芥川の歴史小説は主観の投影であって、歴史とは単にテーマを生かすための背景にすぎないという事は多くの先学の指摘する所である。

「僕が昔から材料をとるのは、大半この『昔々』と同じ必要から起っている。という意味は今僕が或るテーマをとらえて小説に書くとする。そうしてそのテーマを芸術的に最も力強く表現するためには、或る異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起ったこととしては書きこなしにくい。もしたって書けば、多くの場合不自然の感を読者に起させて、その結果せっかくのテーマまでも犬死をさせることになってしまう。所でこの困難を除く手段には『今日この日本に起ったこととしては書きこなしにくい』という語が示しているように、昔か（未来は稀であろう）日本以外の土地から起ったこととするより外はない、僕の昔から材料をとった小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障碍を避けるため舞台を昔に求めたのである。……」（問に答う）

即ち芥川はそのテーマを生かすために、背景を歴史的過去に求めたのであるが、彼の不自然をいとう気持は、背景の設定に於ても強く働き、従って背景自体の合理化という方向にも進んで行った事は想像に難くない。即ち歴史尊重の念より出発し、遂にその束縛から「歴史ばなれ」を考えた鷗外とは逆の方向に進んで行ったのである。この点に関しては後にふれたい。

さてこの戯作三昧にあっても、馬琴その人や時代考証は制作にとっては第二義的なものであり、老馬琴を通して芥川その人の創作上の心理を語ることがテーマになっている事は、何人も否めぬ所であろう。即ち老馬琴の中に芥川自身を全面的に投影した告白的な作品なのである。

俗衆に対する作者の孤独、芸術と道徳の二元相剋、あらゆる世俗的な支障を克服するところの芸術表現の三昧境等がテーマであり、これはそのままこの作品に於ける芥川の問題提起であり、この作品を論ずるためには以上の諸点を考察の中心とすべきであると思う。

大体この作品は芥川が大正五年大学を卒業し、海軍機関学校の教官となり、田端の家の桎梏からはなれて鎌倉に寓居をかまえた翌年、大阪毎日新聞に掲載したもので、彼の生涯に於て最も幸福な又健全な時代のものである。と同時にこの作品に取材されている馬琴も、息子の宗伯が松前老公の御抱医師となり、神田同朋町に邸宅を構えて、彼としては最も幸福な時代の事であり、両者の生涯に於ける立場がよく似通っている。

芥川はもともと馬琴の愛好者であり、随筆その他にも馬琴賞讃の声を聞く事が出来るが、これは彼の創見と言っていいであろう。明治十八年「小説神髄」で馬琴排斥の烽火が上げられ、やがて自然主義の世になってからは、馬琴の評価はその底を衝き、それがそのまま大正期に及んでいたのだから。

さて戯作三昧に於ける馬琴は、彼を理解し得ぬ愚昧な読者乃至評論家に悩まされている。描写はまず風呂屋の情景から始まる。入浴中の馬琴は最初に近江屋平吉の賞讃に会って、好意と軽蔑とを同時に味わわされる。次いで馬琴は彼の小説を罵倒してやまない眇の男に出会う。馬琴はそれが一顧にも価しない愚論であることを知りつつも次第に不快になってくる。これらには一般読者や自然主義系評論家に対する芥川自身の気持の反映を見てよいと思う。

「……みんなありゃ焼直しでげす。……ずぶ京伝の二番煎じじゃ呆れ返って腹も立ちゃせん。」「馬琴の書くものはほんの筆先一点ばりでげす。……又当世の事はとんと御存じなしさ。それが証拠にゃ、昔の事でなけりゃ書いたというためしはとんとげえせん。」「そこへゆくと一九や三馬は大したものでげす。あの手合の書くものには天然自然の人間が出ていやす。決して小手先の器用や生囓りの学問で、揑ちあげたものじゃげえせん。……」「兎に角、馬琴は食わせ物でげす。日本の羅貫中もよく出来やした。」

眇の男の一つ一つの罵言は芥川自身が当時、しばしば受けなければならなかった悪評でもあった。古今東西の文献より材料を得た芥川の作品は古典の焼直しと見れば見えようし、鷗外の二番煎じとも言えば言えた。又現代に取材せず、背景を常に歴史的過去に求めたことは、「当世の事はとんと御存じなしさ」という非難を誘い、作品の骨組を自己の生活におかず、その観念のなかから構成したため、写実派の作家の描く人間像に比して現実的迫力にかけた点もあったであろう。従って「小手先の器用」とか「生囓りの学問」という作中の批評も或る面では正鵠を得た芥川批判だった。そしてそれらは創作の本道はリアリズムであると信じて疑わない自然主義系評論家が絶えず彼にあびせていた罵言であり、彼はそういう非難を確かにその自意識の中に持っていたのであろう。や

がて馬琴は不快にたえて家に帰る。家に帰れば、和泉屋市兵衛がまちかまえている。大体馬琴は来客嫌いであった。彼の三知己の一人、讃岐高松藩の江戸詰家老木村黙老との交際は四十年もつづいたが面会は生涯ただの一、二度であった。又彼は雑談を「無用の長談」「役にも立たぬ世間話」として極度に嫌ってもいた。和泉屋市兵衛の俗悪を怒る場面は「馬琴日記」にも見え、この間の事情はよく事実に即していると思う。又市兵衛が作家を自家の職人の如く考えて、呼びすてにするのを気にする馬琴に就ては「芥川がブルジョアの様相をこの一出版業者を媒体として語っており、資本主義の実害を急速に成長せしめた近代日本の俗悪を、そのメカニズムにおいてはとらええなかったにしても、その直感に於て促えていたといい得る。」という和田繁二郎氏の見解は首肯出来るものである。

又同様な態度は、当代に陋を極めた改名主の問題にも見られる。饗庭篁村編の「馬琴日記鈔」の文政十年八月二日の条には

「近来肝煎・名主役義を権弄して、さまざまなるたはけをつくし、かれら賄賂を旨とする故、文言に賄賂の事あれば、おのが身に覚えある故に忌レ之、小人の用心すべてかくの如し。尤笑ふに堪へたり。」

とあって馬琴自身も憤慨していた事であった。

芥川にしても「世之介」などで検閲問題があり、ここにも作中人物と作者との二重うつしが見られる。即ち馬琴が口をきわめて改名主を罵倒している所には、芥川の現代社会機構に於ける官僚に対する忿懣が語られていた。

このような彼をとりまく俗悪なるものに対して彼が最も反撥を感じたのは何かというと、それは彼等の愚昧という事である。聰明な彼が愚昧という事をどのように嫌悪していたかは彼の自叙伝ともいえる「大導寺信輔の半生」に「いかなる君子といへども才智なき友人は彼にとっては一箇の道化者にすぎなかった。」とある事によっても明らかである。

さてこのような俗悪なるものへのレジスタンスとして、又俗悪なる者のはびこるこの世の塵労に対する愛想ずかしとして、芸術至上主義的思考が芥川の心中に自然に根を下して行った事は想像に難くない。

「人生は一行のボードレールに若かない。」とのべて、すでに二十才にしてこの世を見限った彼は、常に現実の彼方に何物かを求めていた。平凡な繰返しの日常に対して、激しい何物かを求めていた。「或る阿呆の一生」の中に詩のように語られている一句はそのことを切実に告げていた。

「……この紫色の火花だけは、すさまじい空中の火花だけは命ととりかえてもつかまえたかった。」

この暗夜にうち上げる火花の閃光こそ彼の生涯をてらす唯一の光であり、これはそのまま彼の芸術至上主義につらなるものであった。

この気持は「戯作三昧」のフィナーレ、内面のあらそいを去って、神来の興と共に純粋な表現活動に生きようという作

家の恍惚境にそのまま連っている。「王者のような眼」といい、「恍惚たる悲創な感激」といい、「人生はあらゆる残滓を去って、新しい礦石のように輝いている。」という力強い表現がそこに生れた。これは彼の作家体験に立脚する俗衆に対する宣戦布告であった。そこに「戯作三昧」の成立があった。

又この作品の問題点として道徳と芸術の二元相剋が考えられる。

「それは道徳家としての彼と芸術家としての彼との間に、何時も纏綿する疑問である。彼は昔から『先王の道』を疑わなかった。彼の小説は彼自身公言したように『先王の道』の芸術的表現である。だから、そこには矛盾はない。が、その『先王の道』が芸術に与える価値と彼の心情が芸術に与えようとする価値との間には存外大きな懸隔がある。従って彼の中にある道徳家が前者を肯定すると共に、彼の中にある芸術家は当然また後者をも肯定した。……彼は戯作の価値を否定して、『勧懲の具』と称しながら常に彼の中に磅礴する芸術的感興に遭遇すると忽ち不安を感じ出した。」

この芸術と道徳の相剋をそのまま芥川自身の内面的葛藤と見るのには無理がある。彼は「徳川末期の文芸」の中に、馬琴は先王の道を信じていたといった鷗外に対して、馬琴は先王の道を無条件には信じていなかったと書いている。ここにも芥川らしい創見が見られると思う。然しここでいう道徳とは儒教道徳を指す事は自明の事であり、馬琴が彼の小説を「勧懲の具」と称していた以上、馬琴が儒教を信じていた事は容易に想像される。だからこそ馬琴の場合は、作品そのものの内容にまで儒教道徳が持ちこまれることとなる。しかし芥川の場合は、道徳について批判する作品はあっても、道徳を昂揚するための作品はないのである。するとこの二元相剋を芥川自身の作家生活に於ける問題とおきかえることはあまり意味がない。「地獄変」に於ける良秀の死を道徳への敗北とするのはよいが、それをそのまま芥川の芸術至上主義の倫理的敗北と見るのは適当ではない。彼は早くから人生の無価値を知り、学問芸術の世界に凡てを求めようとしていたのである。芥川が創作の上で道徳に規制される事があったとしたら、それは彼自身の倫理的潔癖さのなせるわざであったろう。ここでは芥川は深くこの二元相剋にはふれず、単に「戯作三昧」に到る伏線として描いており、最後に於て甚だ実感のこもったダイナミックな方法であらゆる作家的煩悶を解決しているのである。

作品の終りの部分、本当には理解してもらえず、家族の中に孤立する馬琴の淋しい家庭の描写は、家族の一人一人の言葉にも綿密な注意がはらわれていて興味深い。

まず妻のお百が不服らしく

「お父様はまだ寝ないのかえ」と呟くと、嫁のお路は縫い物の針から眼をはなさず、

「きっとお書きもので夢中になっていらっしゃるのでしょう」

と馬琴に対して理解のある言葉で応ずる。するとお百は反撥して、

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

といって嫁と伜をみつめる。宗伯は聞えないふりをしている。お路は針を運びつゞけ、蟋蟀はここでも変りなく秋を鳴きつくしている。

このお百について考えてみると、彼女は馬琴より三才も年上であり、眇の後家であった。馬琴はこの癇性の三十後家の所へ、放浪生活の足を洗って入婿したのである。而もお百の会田姓を名のらず、滝沢姓を名のって、その子にも滝沢姓をなのらせている。又彼の長兄の羅文もその頃結婚しているがその嫁は十九才の処女妻であり、家も近いのでお互に交際もあった。馬琴のお百に対する気持が、妻に反映したものか、お百のひがみが然らしめたものか、二人の間にはいさかいが絶えなかった。馬琴はこれを「内乱」と称して、自己の不徳をなげいている。「日記鈔」の二箇所を引用してみると、

「天保九年閏四月十日

一、夜に入お百又予に対して怨言をのべ捨身すべしなど云。予徐にこれを諭して七年以来吾家治らざるは畢竟吾不徳の致す処人を怨むるによしなし、夫婦七十余歳に至れば余命幾かあるべき、無益の怒りに心を労する事なかれと、万事我不徳にして致す所を以教諭す。しかれども全く甘服なすにあらず只聊怨怒をくつろぎてやむ。女子小人の養ひがたきは聖人すらしかり、況んや凡夫のわれら実に愧るに堪たり。

天保九年五月十六日

一、右内乱にて今日予著述休筆諸事廃業也。事皆吾不徳の致す所人を怨るの心なし、その罪吾一人にあり、おそるべし、つつしむべし。」

露伴はこれを評して、「内乱の二字下し得て妙、七十余歳にして何事をかぐどつきにけむ、老来つて獅子愈々神威あり、曲亭翁の迷惑さこそと思ひやらる。」といっている。

晩年に致っても内乱相ついだのは宗伯の死後、馬琴がことにお路を重んじた事による嫉妬にも一因があったと思う。又息子の宗伯であるが、生れつき虚弱で而も癇性であり、怒れば母や妻をも打擲する位であった。然しいかにも馬琴らしい儒教道徳を教えこまれた点もあって、馬琴にだけは至って従順であり、又尊敬もしていた。従って作中でも母の言葉にも答えず、黙々と丸薬を作っているのは自然でよい。

お路は宗伯の死後も厳格なる舅姑につかえ、馬琴の失明後は、彼の口述の筆をとり、遂に八犬伝を大成せしめたのである。その賞讃の言葉は日記の中にもみちみちている。

「お路は殊に立ちはたらき実に寸暇なし、彼なくばあるべからず。」と全く頼りきっている。そのようなお路の描写も簡潔ながら描き得て妙と言えよう。

（二）

さて、芥川の歴史小説に於ける背景及び時代考証について

考えてみると、彼の小説にあっては第二義的な事ではあるが、到って精密に調査されており、不合理や錯誤の少ないのに驚く。これは始めにのべた如く彼の不自然を嫌う気持が、必然的に然らしめたものであり、又彼の学究的素質を証拠だてるものでもあるが、この「戯作三昧」に於てはどのようであったか、饗庭篁村の「馬琴日記鈔」を参考に考えてみたい。

馬琴日記は現在東大・早大に一部、天理大に大部を蔵するのであるが、未だに殆んど翻刻されておらず、原文は彼の眼病も手伝って到って読みにくい。又馬琴の書簡として翻刻されているものは、彼の三知己といわれる殿村篠斎・木村黙老・小津桂窓にあてたもの位で、この三人は、彼の小説が出る度に書評を書き送って、意見を闘わせていた。従ってこれらの手紙は文学上の事のみならず、家庭の瑣事にまでわたった貴重な文献であるが、これらが世に出たのは大正十年、藤井乙男によっての事である。又和田万吉の「馬琴日記抄」（天保二年のみ）もあるがこれは大正十三年に出版されており、「戯作三昧」の書かれた六、七年後の事である。この様に見てくると芥川が参考にし得た文献は篁村のもの以外にはあまりなかったらしい。

馬琴は放浪生活の後、やや落着のある生活に入ってから、即ち会田氏に入夫してから三度其の居を移している。最初は飯田町の本宅に住んだ二十七才から五十八才までの三十一年間。次は明神下即ち神田同朋町で彼が宗伯と同居した文政七年から孫の太郎のため四谷に家を求めた七十才までの十三年間。最後は四谷信濃坂の家で、七十才から八十二才で彼の没するまでの十二年間である。

「戯作三昧」の材料となっているのはこの二番目の明神下の家であり、宗伯が松前老侯の眷顧をうけて三人扶持の小禄ながら医師として世に立ち、彼が多年の念願であった滝沢家再興の緒を見い出した最も得意の頃である。

まず「戯作三昧」冒頭の風呂屋の情景についてであるが、「日記鈔」には次の記述がある。

「天保八年十二月晦日、四半時前より予太郎同道にて辻銭湯へ罷越し入湯す。七月以来久しく不レ浴故也。銭湯は去年十一月転宅後はじめて罷越す、行歩不便の故也。ざくろ口出入不自由且垢も多くなし、帰路同所茶店にて休息いたしからくして九時頃帰宅す。」

時に翁は七十才であり、四半（今の十時ごろ）から風呂に行き九時頃（今の正午ごろ）に帰宅している。歩行不便もさる事ながら、四谷信濃坂の新宅に引越し、修繕建増して、翌日は天保九年の元旦の事であり、やむを得ず入浴したものらしい。これによってもわかるように馬琴はひどい入浴嫌いであった。

この日の入浴も五ケ月ぶりの事で、銭湯へは約一年ぶりである。ここに「七月以来久しく入浴せず」とあるのは行水のことで、それにも係らず「垢も多くなし」といっているのはどういう事であろうか。馬琴の入浴は平生でも年に五、六回を出ず、又家中が風呂嫌いで、宗伯は病身故、浴後の疲労甚し

く、一、二日はねる事が常であったし、お百もこれに近かったようである。太郎の如きも四才にして始めて銭湯に入り、六、七才に生長しても、「太郎は去年来久しく銭湯に入らざるより、風呂の中暗きを嫌ひ、おかゆのみにて風呂に不レ入、寒風の節尤も不便」とあって銭湯に行っても浴槽に入らなかった位で、一家の風呂嫌いは尋常一様ではない。従って、この間の事情に着目すれば、「戯作三昧」に於ける銭湯での馬琴の描写は、もっと別なものになっていいように思う。

次に和泉屋市兵衛の事であるが、馬琴との因縁は深いもので、馬琴の処女作「甘日余つかひはたして四十両尽用二分狂言」（寛政三年）はこの和泉市から出版されたものである。従って一番親しかった書肆もこの和泉市であったらしい。市兵衛が馬琴を訪問して原稿の催促をする様な事も多かったらしく、「日記鈔」にも次のように見える。

「天保三年四月二十八日……合巻の作間に合かね可レ申、くはしく申断、右金子不二請取一といへども遅速はともかくも折角持参仕候間抂て預置くれ候 様すむるに付無レ拠任二其意一右金子預りおく、用談数刻夕七時過帰去」（金瓶梅潤筆の事）又天保九年二月六日の条にも彼の来訪に対し、「茶菓を饗す、雑談数刻帰去」などともあり、馬琴の最もにくんだ無用の長談の主がこの人であった。馬琴は迷惑しながらも、神妙に彼を遇している。然しこの様な事は作家稼業としては止むを得ざる事で、中には美濃屋甚三郎の如く居催促をする者もあった位である。市兵衛との談話の中にある鼠小僧の話は「日記鈔」にも略説を掲げているが、これは別に市兵衛の話ではなかった。兎も角書肆の代表として芥川がこの和泉市をえらんだ事は適当と思われる。又彼の遅筆の事であるが、終日書斎にこもって著作していたが、その量は至って少なく、一頁十一行四十二、三字詰で多い時で五、六枚程度で、晩年は一、二枚であったらしいから、これは文章に彫琢をきわめた芥川と通ずる所があり、己の遅筆を自分の芸術的良心を計る物指しとして尊ぶ気持は、そのまま芥川の気持でもあったろう。

次に渡辺華山の来訪が述べられているが、日記より見れば華山との交友はさほど深いものとも思えない。而も「戯作三昧」に於ては非常に長い談話も見えて、而も無理がないのは「日記鈔」以外の典拠も考えられてくるし、研究家による示唆も考えられる。一般に「新思潮」派の人々の馬琴への関心は深いものがあり、菊池寛の「恩讐の彼方に」なども、馬琴の「石言遺響」の影響が考えられる。したがって芥川の周囲に馬琴研究のあったという推定も不可能ではない。

大体華山は始めは馬琴の友人ではなく、息子宗伯の画友であった。従って少年時代から滝沢家に出入しており、三宅公の重臣の子である事などが、階級意識の強い馬琴の意に適わないわけはなかった。又華山はもとより俊鋭の才であったから博識の馬琴に接して大いに得る所のあった事も想像に難くない。所が十年近く交際がとだえて文政末年頃より又来訪が多くなっており、この頃はもはや宗伯の友人ではなく、馬琴の友人となっていたものらしい。華山のあげた友人の記録に

は馬琴のみあって宗伯は出ていない。又馬琴の「羇旅漫録」などにも華山が挿絵をかいており、両人の仲は親しいものであったらしい。「日記鈔」の文政九年の華山来訪の所には「……余対面。閑談数刻……」とあり、天保二年の所にも「……則秉燭対面。雑談数刻……」などとあって大いに意気投合するものがあったらしい。華山は後年蘭学に傾き、進歩的な経世済民の思想を身につけたのであるが、馬琴の交際した彼は画家としてのものである事は「著作堂雑記」「日記」等からも推察される。したがって「戯作三昧」に於ける両人の会話は到って無理のないものになってくるのである。然し思想的には両人は大いに相違していたらしく、馬琴は真山青果の言の如く、水戸学の影響を多分にうけた偏狭自尊の日本主義者の一人であったと思われる。天保十三年華山自殺の顚末をのべた所にも

「……忠臣の志也と云、尤憐むべし。此故に三宅殿を御奏者ばんになされしなるべし。華山老母あり、妻あり、娘あり、何れも薄命の至りなり、痛むべし。」とあって、自殺の原因が三宅公の栄達を図るという事にのみ重点がおかれており、思想的なものには一切ふれていない。「戯作三昧」の両人の会話に於て強いて言えば、華山の言葉の中に本来の友であり、而も常に病弱であった宗伯について一言ものべられていない事が、少しもの足りない位のものである。

最後に馬琴の庭についてのべるが、それは「戯作三昧」の中ではこんな風に描かれている。

「和泉屋市兵衛を逐い帰すと、馬琴は独り縁側の柱へよりかかって、狭い庭の景色を眺めながら、まだおさまらない腹の虫を、無理におさめようとして、骨を折った。

日の光を一ぱいに浴びた庭先には、葉の裂けた芭蕉や、坊主になりかかった梧桐が、槇や竹の緑と一しょになって、暖かく何坪かの秋を領している。こっちの手水鉢の側にある芙蓉は、もう花が疎になったが、向うの袖垣の外に植えた木犀は、まだその甘い匂が衰えない。そこへ例の鳶の声が遙な青空の向うから時々笛を吹くように落ちて来た。」

この神田の家は馬琴が最盛期に息子宗伯のために町医者の家を買ったもので、借地四十坪、建坪は十六坪ほどあって、飯田町の本宅よりもよほど広いものであった。家の東方三分の一をしきって刀研師が住んでいたが、後にこれを買いとり、全部で借地八十坪、建坪二十坪弱のものとなった。如何に文人不遇の時代とはいえ、一代の文豪の住居には決してふさわしいものではなかったが、馬琴はこの家を奢侈贅沢の極みとして、終世悔恨の種としているのである。「改過筆記」に、家庭の不和も宗伯の死も凡てこの贅沢の為であると記している程である。

さてその庭であるが、馬琴ははじめて庭らしいものを持つ事が出来、文筆稼業の心気転換にその庭を愛した事は当然のことと考えられる。日記にも多く庭の事が見え、「日記鈔」には華山の記事の倍以上もの引用がある。

庭好きの馬琴は植木屋を入れて相当に手入れもしたが、茄

子畠と菜園もあり、又池もあって、地坪の割には実に多くの樹木が植えられている。まず果樹であるが、殆んど数をつくしているといって過言でない。大中小の梨・柿・柘榴・中豊後梅（庭の正面に唐梅、その他紅梅）・りんご・朝鮮ざくろ・杏・桃などが多いものは二、三本もあったし、北庭の葡萄などは毎年四百房もみのって池田屋（果物屋）へうり渡している。その代金は申年は金壹分貳朱、酉年も壹貫四百文、当年は貳朱貳百文などと年々記載されている。又一度は医学にも志し、平常も丸薬を製造販売していた位の彼の事であるから、薬草は数しれず植えてあった。篁村も「日記鈔」にこう記している。

「翁も若き時は山本宗洪の弟子となりて、一度は薬研に摑まりし人なり。其の志を継ぎて現に宗伯は医師なり。数坪の庭は景致の為にあらずして、本草何くれとなく植て手入をせられしなり。文宝堂（蜀山人）曰く『明神下の曲亭の庭は小薬園の趣あり、主人多く動植物の名を知る為のみに集むるにはあらじ云々』その庭のさま以て推知すべし。」

馬琴の庭は、日記にも、花さふらん、まいくわい、丁字花、あした草、つはぶき、鬼人草などの名が記され、かなり実用的な要素の多いものであった事は明らかである。

勿論観賞用としても、黒松・赤松・五葉松・檜・珊瑚樹・山茶花・楓・槇・梭欄などが植えられていた。又植物としては秋海裳、あさがほ、ばらん、合歓（ねむ）の花などの名が見えている。池は南方に長さ二丈四、五尺、わたり一丈許のものを作り、炎天に水の涸れる事をおそれて深さ一丈とした。然し水は多くなかったため、坐敷からは水は見えず、蓋のない窖（あなぐら）の様であった。馬琴はこれを埋めようとしたが土がないため、放置せざるを得なかった。（改過筆記）宗伯死後は之を埋めている。

この池の近くに築山もあったから、随分といりくんだ庭であったに相違ない。

芥川の描いた庭は郊外の文化住宅式の感じであるが決してそのようなものではなかった。大体、芥川の書いた植物は芭蕉、梧桐、芙蓉、木犀、竹などであって、ことごとく馬琴の庭にはなかったものばかりである。「日記鈔」に於てもかなりなスペースを占めている庭の記事に対して、目を通さなかったのは芥川としては珍しい見落しであろう。